

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00395

研究課題名（和文）モールス信号の政治学 ヘンリー・ソロと19世紀ネイティヴィズム思想

研究課題名（英文）The Politics of Samuel Morse's Telegraph Signals

研究代表者

高橋 勤 (TAKAHASHI, Tsutomu)

九州大学・言語文化研究院・教授

研究者番号：10216731

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題の研究成果については、令和元（2019）年度に「モールス信号の政治学 ソローと一九世紀ネイティヴィズム思想」という論考を共著書のかたちで発表しており、令和2年度ではさらにネイティヴィズム思想にまつわる陰謀論に関して巽孝之著『パラノイドの帝国』の書評を日本ソロ学会の学会誌『ヘンリー・ソロ研究』に発表している。最終年度の考察は日本ナサニエル・ホーソーン協会全国大会シンポジウム「アメリカン・ルネサンスと白人至上主義の運命」（2022年5月20日、招聘パネリスト）において研究発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本国内において、さらに合衆国におけるソロ研究においても、アイリッシュ表象の問題は従来奴隷解放思想と同様にリベラルな政治思想、あるいはキリスト教的人道主義との連関で解釈されてきた。本研究の学術的意義は、ソロのアイランド人表象をネイティヴィズムとの関連において捉えたことであり、その起点としてサミュエル・モースのカトリック排斥思想とソロの文学的想像力に接点を見出した点にある。わが国のアメリカ文学研究において、モースのカトリック排斥論を分析し、19世紀中葉におけるネイティヴィズムの動きに注目した最初の研究であると確信する。

研究成果の概要（英文）：As for the published articles, I co-authored The Politics of Homeland (Ed. Koji Kotani, Kaibunsha, 2019), in which I contributed the essay "The Politics of Samuel Morse's Telegraphic Signals." In 2020, I published a review essay on The Paranoid Empire (Taishukan, 2019) by Takayuki Tatsumi, on the Bulletin of the Henry Thoreau Society in Japan. Also I reported the harvest of the final research year by reading a paper "Conspiracy and the Vision of America" at the Annual Conference of Nathaniel Hawthorne Society in Japan (May 20, 2022).

研究分野：アメリカ文学、環境文学

キーワード：ヘンリー・ソロ アイランド人表象 ネイティヴィズム 電信技術 サミュエル・モース ノーナッシング党 陰謀論 パラノイド・スタイル

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

外国人難民・労働者の流入と排外思想の形成は世界における今日的課題だが、本プロジェクトでは、19世紀合衆国において台頭したネイティヴィズム（排外主義思想）を考察の対象とし、アメリカン・ルネサンス文学、特にヘンリー・ソローの文学的想像力に及ぼした影響について検証した。研究代表者は前研究課題「座礁の文化史 アメリカン・ルネサンスと海難事故」（15K02341 平成27年度-平成29年度）において、19世紀中葉アイルランド移民の合衆国への渡航状況を調査しており、その延長線上で合衆国におけるアイルランド移民の状況と、排外主義思想の台頭について考察したものである。

1840-50年代、北部マサチューセッツ州では移民の急増とともに、ネイティヴィズムの動きが活発化する。1854年、すなわちソローの代表作 *Walden* が刊行された年には、ネイティヴィズムを思想的背景としたノーナッシング党がマサチューセッツの政界に躍進する。こうした政治状況下、ソローの作品にたびたび登場するアイルランド移民の表象について考察するのが本研究課題のねらいである。

従来ソローのアイリッシュ表象については、おもに『ウォールデン』に登場するアイルランド移民ジョン・フィールドの描写をめぐって、セルフ・カルチャー（自己修養）の具体的事例として考察されてきた。いわば人種的多様性を容認するリベラルな政治思想の観点から、あるいはキリスト教的人道主義の観点から論じられてきたように思われる（例えば、Laura Dassaw Walls, *Henry Thoreau: A Life*, 2017）。他方において、アイルランド移民への偏見・差別意識、あるいは同時代のネイティヴィズムの影響を示唆した代表的研究には Timothy Powell, *Ruthless Democracy* (2000)がある。本研究課題はパウウェルの著作を主要な先行研究としながら、ネイティヴィズムの論拠とされた Samuel F. B. Morse (1791-1872) のカトリック排斥論とソローの作品との関連性について考察した。

## 2. 研究の目的

電信技術、すなわちモールス信号の発明家 Samuel F. B. Morse は優れた画家としても今日知られているが、その反面、きわめて強硬なカトリック排斥論の唱導者でもあった。モースは1835年 *Foreign Conspiracy against the Liberties of the United States*、および *Imminent Dangers to the Free Institutions of the United States Through Foreign Immigration* という二つの政治パンフレットを刊行する。これらのパンフレットはローマ・カトリック教会がアメリカ中西部に入植を進め、合衆国社会の転覆を企図していると警告したのだが、こうしたカトリックの陰謀説が1840-50年代に台頭するネイティヴィズムの思想的論拠を形成したと考えられてきた。

本研究課題は、19世紀中葉に台頭したネイティヴィズム思想を検証するとともにソロー作品との接点を考察するものだが、考察の起点として、サミュエル・モースにみられるカトリック排斥思想を検証し、電信技術による「想像された共同体」の促進と、カトリック教徒、特にアイルランド移民にたいする排斥思想が表裏一体をなした構図を分析する。さらにそうした統一と排除の構図がソローの作品の中でどのように交錯し、共鳴したかを考察するものである。

またモースの政治言説が刊行された1830年代半ばは国家言説とともにニューイングランドにおいて地方史（ローカル・ナラティブ）が形成された時代でもあり、モースが主張する

国家観とソローやエマソンが同時代に共有した歴史観がどのように合流するのか検証したいと考える。

### 3. 研究の方法

このプロジェクトは主に(1) サミュエル・モースの排外思想と19世紀合衆国におけるネイティヴィズム思想の考察、(2) アメリカン・ルネサンス文学におけるアイリッシュ表象の分析、および(3) 19世紀国家言説(ナショナル・ナラティブ)にみる融合と排除の構図の分析、という三つの視点から行われる。

- (1) サミュエル・モースの排外思想と19世紀合衆国におけるネイティヴィズムの考察  
モースによる前掲の2冊の図書を分析し、その反カトリック主義の要点を整理するとともに、1840年代以降に顕在化するネイティヴィズム思想、さらにはノー・ナッシング党の形成と躍進について考察する。
- (2) アメリカン・ルネサンス文学におけるアイリッシュ表象の分析  
ソローの日記や『ウォールデン』に見られるアイルランド人表象、『コッド岬』に描かれた移民船セント・ジョン号の座礁事件、さらにはメルヴィル *Redburn* に描かれたアイルランド移民の渡航の惨状等、アメリカン・ルネサンス文学に描かれたアイリッシュ表象を分析する。
- (3) 19世紀国家言説(ナショナル・ナラティブ)にみる融合と排除の構図の分析  
アラク(Jonathan Arac)は1830年代に合衆国のナショナル・ナラティブが形成されたと指摘しているが、同時期に発表されたモースの反カトリック主義思想はそうした国家言説と表裏一体であったと考えられる。こうしたナショナル・ナラティブの形成とソローやエマソンが抱いた国家観とはどのように接合し、融合と排除の構図を共有したかを考察の対象にする。

令和元(2019)年度の研究計画は、モースによる前掲2書 *Imminent Dangers* (1835)、*Foreign Conspiracy* (1835)を分析し、その反カトリック主義の要点を整理するとともに、1840年代以降に顕在化するネイティヴィズム思想、さらにはノー・ナッシング党の形成と躍進について考察した。主要な参考文献としては Anbinger, Tyler. *Nativism and Slavery: the Northern No-Nothings and the Politics of the 1850s* (1992)、Billington, Ray Allen. *The Origin of Nativism in the United States, 1800-1844* (1974) 等が挙げられる。

令和2(2020)年度については、アメリカン・ルネサンス文学におけるアイリッシュ表象の分析を進めた。ソローの『ウォールデン』や日記に見られるアイルランド人表象、『コッド岬』に描かれた移民船セント・ジョン号の座礁事件、さらにはメルヴィル『レッドバーン』に描かれたアイルランド移民等、アメリカン・ルネサンス文学に描かれたアイリッシュ表象を分析した。主要な参考文献としては Buckley, Frank. "Thoreau and the Irish." *NEQ* 13.3 (Sep. 1940):389-400、Michaels, Walter Ben. *Our America: Nativism, Modernism, and Pluralism* (1995)、Timothy B. Powell, *Ruthless Democracy: A Multicultural Interpretation of the American Renaissance* (2000) 等が挙げられる。

令和3(2021)年度については、Arac, Jonathan. *The Emergence of American Literary*

*Narrative: 1820-1860* (2005)を主要な参考文献として、合衆国における国家言説(ナショナル・ナラティブ)の形成について考察し、モースの反カトリシズム思想がそうした国家言説の形成と表裏一体である事実を検証した。

#### 4. 研究成果

本研究課題の成果発表については以下のとおり。

令和元(2019)年度には、第91回日本英文学会全国大会(2019年5月25日、於安田女子大学)において「モース信号の政治学 ソローと一九世紀ネイティヴィズム思想」という研究発表(招待発表)を行った。また同年同じタイトルの論考を『ホームランドの政治学 アメリカ文学における帰属と越境』(開文社、2019年)に共著として刊行した。

令和2(2020)年度には、さらにネイティヴィズム思想にまつわる陰謀論に関して、巽孝之著『パラノイドの帝国』の書評を日本ソロー学会の学会誌『ヘンリー・ソロー研究』(46号、2021年、85-88)に発表した。

令和3(2021)年度には、日本ナサニエル・ホーソン協会全国大会シンポジウム「アメリカン・ルネサンスと白人至上主義の運命」(2022年5月20日開催、招聘パネリスト)において「陰謀論と国家のヴィジョン—ソローにおけるネイティヴィスト的共鳴」という研究発表を行った。

そのほか研究期間内におけるソロー研究関連の成果としては、英文の依頼原稿“Thoreau's Confucianist Turn in Japan.” *J19: The Journal of the Nineteenth-Century Americanists* (Fall 2021): 453-461, 『野生の文法 ソロー、ミューア、スナイダー』(九州大学出版会、2021年)、「自然保護という思想 ソローからミューアへ」エコクリティシズム学会 2021年8月14日、(オンライン招待講演)、「ホーソン文学の魅力」北九州アメリカ文学会、11月13日(招待講演)、「ホーソンにおける「暗黒」の系譜学」福岡大学大学院人文科学研究科英語学英米文学専攻主催講演会、2022年1月14日(オンライン招待講演)、および(書評)吉川朗子、川津雅江『トランスアトランティック・エコロジー—ロマン主義を語り直す』『アメリカ文学研究』(日本アメリカ文学会)57号、2020年、pp. 98-102 等がある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高橋 勤	4. 巻 46号
2. 論文標題 書評 巽孝之『パラノイドの帝国』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ヘンリー・ソロー研究	6. 最初と最後の頁 85-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋 勤	4. 巻 57号
2. 論文標題 書評 吉川朗子・川津雅恵編『トランスアトランティック・エコロジー』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アメリカ文学研究	6. 最初と最後の頁 98-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takahashi, Tsutomu	4. 巻 -
2. 論文標題 Thoreau's Confucianist Turn in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 J19: The Journal of the Nineteenth-Century Americanists	6. 最初と最後の頁 453-461
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋 勤
2. 発表標題 モールス信号の政治学—ソローと19世紀ネイティヴィズム思想
3. 学会等名 日本英文学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋 勤
2. 発表標題 陰謀論と国家のヴィジョン－ソローにおけるネイティヴィスト的共鳴
3. 学会等名 日本ナサニエル・ホーソン協会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 高橋 勤ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開文社出版	5. 総ページ数 286
3. 書名 ホームランドの政治学：アメリカ文学における帰属と越境	

1. 著者名 高橋 勤	4. 発行年 2021年
2. 出版社 九州大学出版会	5. 総ページ数 214
3. 書名 野生の文法－ソロー、ミューア、スナイダー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------